

いのち寄り添う

大震災 昔の現場から

— つながり、そして明日へ⑦ —

目的なので、当然です。にカンパではなく、被災してA.M.D.A派遣団にそれぞれの信仰がしっかりと祈りが届くようにとの思いを込め、活動をした。遺体安置所、宮城・石巻の鹿島御見神合っているのを、決して「初回だけで1カで百数十人の犠牲者を弔って誦経をし、現地の曹僧侶が金光教教会長らとせん」と胸を張った。月も続けたのは「これからこそが大変。ずっと忘れない」と支えますよ」という意思表示だった。黒住副教主自身も世界宗

違い乗り越え 一緒に行動

宗教と医療の絆強まる

岡山市の繁華街で昨年3月、網代等に袈裟の僧侶、法被を着た神職、司祭服の神父らが道端に並び、青い募金箱を携えて義援金を呼び掛けた。普段目にするここのない光景だが、行き交う市民の反応は良かった。

1996年2月に起きた中国雲南省大地震で、岡山に本部があり世界中の災害被災者や難民の医療支援をしているA.M.D.Aが、地元各宗教団体の協力を要請し、寺院・教会などが教派の違いを乗り越えて救済物資の調達、事務局長の黒住宗道、黒住教副教主(50)は「そんな違いを乗り越え、一緒に行動することが

大震災で人と人とのつながりは、被災者と支援の宗教者という立場の違いを超え、そして宗派や教派、また被災地と遠隔地との距離をも超えて広がろうとしている。岡山

児や難民支援で、A.M.D.Aに寄託する形で募金活動を展開して、そのたびに何十人、A.M.D.Aと組むのはその市内の黒住教本部日拝所「私たちの特質は岡山と



諸宗教の色とりどりで行われたRNNによる震災慰霊祭。東北の被災地に向けて祈った(2011年4月、岡山市の黒住教本部で)

とはない。RNNで「宗教者らしい支援」が論議になることもあるが、「祈りに基づく行動、行動を伴う祈りこそが求められる。まず相手に寄り添うことです」と強調する。それは経験からだ。阪神・淡路大震災で炊き出し支援に行った際、所用で岡山にいったん帰り、戻ると避難所の被災者に「兄ちゃん、家あってええなあ」と言われ絶句した。東北でも「つらい時はお互いさま。今度何かあったら助けてね」と言

は宗教協力の場でこそ発揮されるべきです」とす。この災害に天地自然への畏れと慎み、人間の根本を見つめたい」と言う。活動の規模はささやかでも、RNNと被災地との縁ができたという。メンバーの神父は若手の力

「そんな中で、」と「」く使用すればそれに越した」(北村敏泰)